祝島ネット21会報

第72号
2024年 2月20日 発行

いわいしま通信

神舞の日程が決まりました

今年は4年に一度の神舞神事の年。前回はコロナ禍のために中止になりましたので、8年ぶりの開催になります。島民だけでなく、祝島の出身者の皆さんも久しぶりの神舞を楽しみにされておられるでしょう。神舞の日程に合わせて帰省する計画を立てられている方も多いのではないでしょうか。

今年の神舞は、以下の3日間の日程で開催されることが決定しました。

◎8月16日（金）　入船神事・神楽
◎8月17日（土）　神楽・直会
◎8月18日（日）　神楽・出船神事

入船神事の神様船

８年前（2016年）の神舞の時と比較すると、当時410人だった島の人口は、現在は280人に減少し、8年分の高齢化も進みました。また、ここ数年の酷暑を考慮すると、今まで通りの規模での開催は難しいのではないか、との判断で、日程は3日間に短縮、神楽の舞場は仮神殿を建てるのではなく体育館を利用する等、島民への負担が軽くなるように簡素化して開催することになりました。

それでも、神舞が千年以上前から続く祝島島民と伊美別宮社との交流を未来へつなぎ、そしてお互いへの感謝を伝える重要な行事であることに変わりはありません。今までのように盛大なお祭りはできなくとも、心のこもったおもてなしで、伊美別宮社の皆さんをお迎えできるよう、島民が一致協力して準備作業を進めていければと思います。

神舞の準備作業は以下のように進められる予定です。

◎切り飾り作り：4月中旬から
◎縄ない：5月中旬から
◎苫（とま）編み：7月初旬から
◎舞場設営：8月3日～8月10日

苫編み作業

上記以外にも、竹切り、カヤ刈りなどたくさんの作業があり、その都度、島内の掲示板に掲載されることになっています。出身者の皆さんで早めに帰省が可能な人は、準備作業のお手伝いをぜひお願いします。

尚、祝島ネット21では、会員の皆さんの年会費の一部を「神舞基金」として積み立てています。今年の神舞のために、積み立てられた基金（約50万円）を全額、神舞奉賛会に寄付させていただきます。

目　次

神舞の日程が決まりました	1
祝島・記憶の玉手箱	2
会員リレーコラム	4
季刊誌『アジェンダ』	5
うっちーさんの観察日記	6
絵っきー展覧会	9
水不足が続いています	9
出島・気仙沼大島視察旅行	10
祝島自由律俳句	11
お知らせ&募集	12
編集後記	12

「祝島物語」　画・大井しげる

＜連載＞ 祝島･記憶の玉手箱(32)　～ 餅まきのお話 ～

語り部:ちーちゃん

島のお年寄りに、毎回違うテーマで昔の祝島の様子を話していただく「祝島・記憶の玉手箱」シリーズ。今回は、年明けに行われた「祝栄丸」の餅まきに因んで、昔の祝島の餅まきの話を、まもなく白寿を迎えるちーちゃん（98歳）に聞かせていただきました。

「祝栄丸」の餅まきの様子（2024年1月18日）
本来は船からまくが、安全のため軽トラックからまいた

司会：こないだ「祝栄丸」の餅まきがありましたが、見に行きましたか？

ちーちゃん：はあ、拾うたで。

司会：えーっ！拾ったんですか！すごーい！（笑）それで何個拾いましたか。

ちーちゃん：餅を7つと、菓子を6つ拾うた。あはは。

司会：あはは。すごいいっぱい拾いましたねぇ！

ちーちゃん：こうやって前垂れ（エプロン）へ入れるんじゃけえ。

司会：それならいくらでも入りますねぇ。（笑）ところで、今日は昔の餅まきについてお話を聞かせてください。

ちーちゃん：餅まき、ゆうたら、船おろしの時と、家建ての時じゃねぇ。家を建てた時はねぇ、棟上げの時にねぇ、瓦を3枚括（くく）って、天井いうか棟にぶら下げるの。そいて、一文銭。

司会：一文銭ですか？

ちーちゃん：一文銭があろう。ねぇ。中い角い穴が開いたのがあろう。昔の。あれをねぇ24枚。それと、差し金（さしがね）に鉋（かんな）に墨壺。

司会：大工仕事の道具ですね？

ちーちゃん：そうそう。棟梁さんが台の上にその大工道具を置いて、一文銭と瓦を上からぶら下げて、いわい（大きい重ね餅）を供えて、そいて務めるの。そのあと、餅まきが始まるのいね。

司会：なるほど。でも、一文銭はまだあったんですか？ 一銭なら見たことあるけど。

ちーちゃん：そうかね、待ちんさいよ、どっかにあったけえ、見せちゃろう。（・・・と、探しに行く。）これこれ。これが一文銭。

司会：寛・永・通・寶。これが一文銭なんですね。江戸時代のお金ですよね。今のお金にするといくらくらいになるんですかね？

一文銭

ちーちゃん：そうじゃねぇ、今の5円ぐらいじゃろうじゃぁ。

司会：そうですか。

ちーちゃん：そいて、その式が済んだら餅まきが始まるの。屋根の上から、こまぁ餅をよけえまいて、そいて屋根の南北の角からいわいを1つずつまくの。ほいて、昔は、ここの者は、いわいを拾うたら、8つに切ってねぇ、そりょう近所やらに配るの。そいじゃけぇ、いわいを拾うよりゃぁ、こまぁ餅をいっぱい拾う方がええいねぇ。ははは。

司会：そうですね（笑）。こないだもそうでしたが、最近の餅まきでは紅白の餅がビニール袋に入ってますよね。昔も紅白だったんですか？

ちーちゃん：いんや、ここで昔からまくなぁねぇ、白の他に、赤やろ、緑やろの色に染めてねぇ。そりょうばらまくの。ビニールの袋もなかったけえ、二日くらい前について、乾かしてからまくのいねぇ。

司会：なるほど。どのくらいの数の餅をついたんですかね？

ちーちゃん：こまあ餅はどのくらいかねぇ、家によって違おうが、よけえつきよったねぇ。いわいは全部で4つ。まくのが2つと、供えるのが2つ。供えた一組は終わってから棟梁さんの所へ持っていくの。

司会：そしたら、船おろしの時はどんな感じでしたか。

ちーちゃん：船おろしの時はねぇ、一文銭が12枚で、瓦はいらんのよ。船じゃけぇねぇ。ほいて、同じように棟梁さんが式をやって、船を海に下ろして、それから神舞の入船のように、この沖を3周回って、それから餅まきが始まるんよ。

司会：大漁旗とか飾るんですか？

ちーちゃん：大漁旗もやりゃあ、笹を立てて色紙で飾ったのもやるいねぇ。大漁旗は船を造った大工さんやら機械（エンジン）を入れた鉄工所が寄付せるんよ。そうやって船を飾って、東方から西方までずーっと3周回るじゃろう。そうやって船を見せてから浜に向いてくる頃にゃあ、皆がしゃーっと浜に座って待っちょるんじゃあ。

司会：餅を拾う準備万端ですね。どこの浜でまくんですか？

ちーちゃん：昔は、今のように港がないけぇ、わかた（自分の家）の沖の浜に船をろくろでのぼせよったんよ。じゃけえ、そこの浜でまくの。西にのぼせる者は西方で、東方の者は東方、浜方の者は浜方でまくのいねぇ。

「紅葉丸」の餅まき（昭和40年代）
写真上：大漁旗で飾った紅葉丸
写真下：浜で餅を拾う大勢の人々

司会：なるほどね。

ちーちゃん：船から陸（おか）に向かってまくんじゃが、餅が浜まで届かずに海に落ちるのもあったけぇ、海に入って拾う者もおったいぇね。家建てもえかったが、やっぱり船おろしの時の方が賑やかじゃったねぇ。そりゃあ、おいかった（多かった）よ。東から西から皆出てくるんじゃけに。最近は拾うのに袋を持って出るが、昔は前掛けを広げてねぇ。「酒屋前掛け」いうて袋に縫うた前掛けをしちょるもんもおったし、拾い込むんじゃけぇ。ほいじゃけぇ、ようけ拾うもんは、なんぼうでも拾うし、ええ拾わんもんは、一つもええ拾わんじゃったんよ。

司会：まくのは餅だけですか？

ちーちゃん：今でこそ、菓子やろも混ぜてまくけども、昔は餅ばっかしじゃった。お大櫃（おだいびつ）に5つ6つくらい餅をついてまくんじゃけぇ。そういやあ、いわいを船まで届けるんは、寅年の人を雇うて持って行きよったんよ。

司会：何で寅年の人なんですかねぇ？

ちーちゃん：そりゃああんたぁ、向こう意気がつおいけえいね。ははは。何か知らんが、寅年の者を雇うて持って行かせよったんよ。

司会：まく餅は誰が運ぶんですか？

ちーちゃん：まく餅はお大櫃に入っちょるけえ、そりょう棒で担いで船まで運ぶんじゃが、そりゃあ、よばれて行っちょる者らが、一杯お神酒をもろうて飲んでから、酔うた加減で、あっちいこっちいふらりふらりせて、「やらせー」言うちゃあ、囃（はや）ぁちゃあ運ぶの。

司会：それは賑やかですね。

ちーちゃん：ほいてからねぇ、餅まきが終わったら、船に乗っちょる人らぁが落としあいをせるの。じゃけぇ、泳げん人は船に乗せられんかったねぇ。それに、今はみな服じゃけぇええが、昔はみな、着物じゃけぇね、祝い事じゃけぇ紋付き袴。そのあとは、皆集まってまた一杯せよったねぇ。

司会：いやぁ、大変だけど、楽しそうですね。今日は面白いお話をありがとうございました。

会員リレーコラム(69)　　～ 遠藤 浩子 さん ～

このコーナーは「祝島ネット21」の会員の皆さんに、自己紹介を兼ねて簡単なコラムを書いていただくコーナーです。今回は、千葉県にお住いの遠藤浩子さんです。昨年末ご家族で初めて祝島に来られました。

定期船「いわい」の前にて
人間がかろうじて写っている唯一の写真です
左が筆者、右が夫です

◎書くきっかけ

関東は千葉県に住んでいます遠藤浩子といいます。

昨年の年も押し詰まった頃、初めて祝島を訪れました。しかも、ほぼ一日だけです。それまで直接的関りは何もなかった私が、リレーコラムを書いていいのかなあと思いながら、「民宿くにひろ」のお二人にとてもよくしていただいたので、お礼の気持ちを込めて書かせていただきます。

◎私と祝島

1986年4月26日に旧ソ連のチェルノブイリ原子力発電所事故が起きたとき、私のお腹には初めての子どもがいて、大変な危機感を持ちました。当時入っていた生協が原発に関する活動をしていたこともあって、迷わず勉強会などに参加しました。そこで出会った人たちと共に、90年代は、写真展、冊子の発行、チラシまき、デモ等々の活動をしました。その中で、原発と人は共存できないという思いを強く持ちました。

祝島のことは、全国で原発を巡り各地元が分断されている中で、「地元住民が一体となって立地を阻止し続けている上関の中心」というように思っていました。で、会員になったのはコロナ禍の2020年後半でした。きっかけは全く覚えていません。フッと「祝島」が気になって検索して購入した「ひじき」と「びわ茶」と「猫はがき」に導かれたのかなと思います。

今回祝島を訪れたのは、通信で一方的にぐっと身近になっていたことと、昨年降ってわいた様な核のゴミ捨て場の話があったことで、とにかく行ってみたいと思ったからです。（幸い、夫と86年生まれの息子も賛同してくれました。）

◎祝島で思ったこと

秀人さんに桟橋まで迎えに来ていただき、民宿に行く途中で、「あれが長島の中間貯蔵施設候補地です」と教えていただきました。本当に海を挟んで目と鼻の先で、私たちを運んでくれたフェリーの航路の脇です。後で、夕日に映える長島と海をもう一度見に行き、その美しさと怒り・不安の感情に、涙が出ました。

「民宿くにひろ」で何をやっていたかといえば、ずーっと那須圭子さん、福島菊次郎さんの書かれた「中電さん、さようなら　山口県祝島原発とたたかう島人の記録」（創史社）を読んでいたのです。そして今更恥ずかしいのですが、これまでどれほど多くの方たちの尊い闘いがあったのか、ということを知りました。

翌日、小祝島方向に自転車で走りました。12月にしては暖かい潮風に包まれ、穏やかな海沿いを無心で走りました。気づいたら出航の時間が迫り、朝市の美味しいコーヒーをすすりながら、「こっこー」、「平さんの棚田」、「シーグラスの浜」は次回のお楽しみとしよう、と思いました。「神舞神事」にもいつか参加したいです。

定期船乗り場近くのふ頭から見える対岸の長島

◎私と原発

2000年代に自分の生活の形態が変わってから今日まで、脱原発に関しては直接的な活動はめっきり減りました。2011年のフクシマ事故のときは自責の念に駆られましたが、自分の生活の場を大事にしつつ出来ることをやっていこうと思いました。一方で、世の中は脱原発の方向になるだろうという期待がありました。

昨年はその期待とは逆の流れになってきた様でしたが、元旦に起きた石川県能登半島の大地震には、改めて地震大国日本と、原発の危うさを思わずにはいられませんでした。誰もが他人事ではなく、教訓を生かしていける社会であるよう、自分ももっと周囲の人たちと話していきたいと思います。

◎これを書いていて気づいたこと

これを書いていて思い出したことがあります。ある有機野菜消費者の会でお呼びした写真家の樋口健二さんのお話です。樋口さんは原発労働者の写真もたくさん撮られていた方ですが、原発は事故が起きなくてもいかに人を損ねていくかというお話をされました。そのことは地元の方たちの人間関係を無残にも分断していくということと併せて、私の中に「自分は当事者ではないが、自分も当事者である」という感覚を強く持たせていただきました。

私はその後、学校や地域で人の話を聴く仕事をやってきましたが、「自分も当事者」という感覚は今の仕事の大切な心持ちの一つになっているのだと気づきました。

ネコの写真はいっぱい撮りました

◎おまけに

國弘ご夫妻に紹介された『Agenda』という雑誌に山戸孝さん（上関町議会議員）のインタビュー記事がありました。その中で、次のことに感銘を受けました。「反対運動をする側として、（原発が）建たないことをゴールとせず、皆の幸福というところにゴールを置き、そのプロセスを考えていくことが必要であるということ、差別や分断を生む運動ではなく、ある点では対立しても、そうでない部分については協調していく姿勢が大切だ」ということです。

私は日頃、人の話を聴くときに、目先の課題（悩み）はその方の希望・幸福へのプロセスの一地点だと考えるようにしています。そしてその方自身に希望・幸福を教えてもらったり、気づいていただいたりしています。そのプロセスは、より柔軟で調和的なアプローチによってゴールに導かれると思います。

権力と闘うのは並大抵ではない覚悟であると言われる、私からしたらとても強い山戸さんが、少し自分と近しい気がして、嬉しくて、勇気づけられました。

季刊誌『アジェンダ』2023年冬号の紹介

京都を中心に活動している「アジェンダ・プロジェクト」が発行している社会問題を考える総合雑誌、季刊『アジェンダ　ー未来への課題ー』（2023年冬号）の特集は、「原発のない未来をつくろう」です。表紙は、祝島のコッコーの写真、そして巻頭のカラーグラビアでは祝島で撮影した写真が数ページに渡って掲載されています。上関原発計画や中間貯蔵施設について、そして祝島訪問記などが書かれています。

購入希望の方は、アジェンダ・プロジェクトのWebサイトにてご購入ください。1冊660円です。

https://agenda-project.com/

うっちーさんの観察日記(1)　～早春の花たち～

内田　祐介

「私」
ひとことでまとめるならば｀植物オタク´。
寝ているときも植物の夢を見ています。

はじめまして、うっちーこと内田ともうします。第一回目なのでまずは自己紹介。私は柳井市生まれですが、小学校に上がる直前に山口県を離れて関西で育ちました。幼少期を過ごした平生町での記憶は･･･まったくと言っていいほどありません。そりゃそうだ。でも、漁師だったおじさんの船に乗って佐合島まで連れて行ってもらったことと、お大師さま参りのときにたくさんノジギクが咲いていたことだけはなぜか鮮明に覚えています。現在は下関市で暮らしていて、休日は庭で園芸を楽しんだり、花の自生地探訪に出掛けたりしています。園芸と自生地探訪はどちらも植物相手ですが、カテゴリー的にはかなり違う趣味で、私の周りでも両方やっている人はいません。園芸種は人が改良したり選抜したりして作ったもので、野生種は神様が創ったものという違いもありますね。なので、自己紹介をするときには今流行りの「二刀流」といっています。植物関連雑誌の連載などを執筆してかれこれ10年になりますが、自生地探訪はその取材も兼ねています。ほかにも絶滅危惧種の保全活動や｀一緒に楽しむ´をモットーに園芸講習会、観察会も行っています。ご依頼いただければ喜んで飛んでいきますよ。

そもそも植物に興味をもつようになったのは小学生のころ、ホームセンターのギフトコーナーに並んだランの花に目を奪われたのが始まりでした。その花はまるで翅を広げたガのような姿で、昆虫採集に夢中になっていた少年時代の私が衝撃を受けなかったわけがありません。ラン科では実際に送粉者の昆虫の雌に擬態して、騙し送粉させる種も少なくはありません。そんなどことなく昆虫チックな花を自分で咲かせてみたいと思って、後日安価な苗を買ってもらったのでした。初めて育てることとなったそのコチョウランの苗は、まあ、あっさり枯らしました。何の知識もないのに、いきなり難易度の高い植物に手を出してしまったわけですから･･･。でもそこで諦めることもなく、小学生高学年になるころには社宅のベランダでさまざまなジャンルの植物を育てるようになっていました。卒業文集に「将来、植物園で働きたい」と書いた夢は叶ったのかな。22年間、研究職として下関市の市営植物公園で展示植物の維持管理や園芸相談、育種（品種改良）などの業務に従事。令和4年に閉園となったのをきっかけに市役所を退職し、現在は北九州市立の植物公園に勤務しています。「四六時中、植物眺めていて飽きないの？」と聞かれることもありますが、もっと植物のことを知りたくて時間が足りないくらい。これからもずっと植物に接していたいと思っています。

初めて祝島を訪ねたのは、去年の3月でした。徐福伝説に登場する植物の取材のため日本各地を歩いていたときに、祝島にも伝説があることを知ったのがきっかけです。徐福伝説は、今から約2200年前（弥生時代が始まったころ）のお話。不老不死薬を渇望した秦の始皇帝の命を受け、徐福一行は東方の海にある｀蓬莱山´を目指し出航しました。祝島の伝説で登場するのは不老不死の実コッコウです。島ではジョの字も出てきませんが、コッコウのほうは

「コッコウの実」
キウイフルーツをそのまま小さくしたようなコッコウ（シマサルナシ）の果実。ひと粒食べたら1000年長生きできるとの言い伝えも。

「ヨモギの杖」
祝島に自生するヨモギは、もはや草ではなく木のよう。ヨモギ杖を使うと中風が治ると伝えられています。

町指定の天然記念物の大株があって、おおよその位置は案内マップにも記されています。ところがなかなか辿り着けず、畑仕事をされていた方に尋ねました「あの～コッコウはこの辺りですか？」するとおじさんは指をさして「コッコウじゃ」なんて。季節的にツルが背の高い木に絡まっているだけで、当然果実も残っていませんでした。伝説によれば徐福一行が上陸したのも春で、碁を打ちながら秋の結実まで島に滞在していたそうです。

もうひとつ気になっていたものがありました。それは古書の記事で知ることとなったヨモギの杖です。いわゆるヨモギはせいぜい草丈1mくらいで、枯れた茎は簡単にポキポキと折れてしまうため杖にはなりそうにありません。ところが、祝島ではゆうに3mに達するとのことでワクワクが抑えきれなくなりました。しかし半世紀以上も前の古書での話。役場などに問い合わせてもこれといった情報を得ることができませんでした。もはや昔話かなと諦めていたところ「國弘さんなら分かるかもしれんから、電話かけてみんさい」と連絡をいただいて、それからとんとん拍子に実物を見ることが叶ったのでした。祝島にはヨモギがたくさん自生していますし、餅や茶用に栽培もされています。そこでハっとしました。蓬莱山ってもしかしてヨモギの島かも！？徐福上陸の地として有力なのは佐賀県佐賀市や三重県熊野市などになるかと思いますが、私は祝島説に一票を投じます。

さてさて、島の山道を散策していると華々しくて`植物オタク´としてはなかなか進めません。藪になったノイバラの茎にミヤコジマツヅラフジが絡まっていたのには釘付けになりました。本種は県内においては絶滅の危機に瀕していて、滅多にみられない植物だからです。そんな希少種から帰化植物まで祝島で見られる植物をまとめるべく、花調べは去年の4月からスタートしました。花のラインナップは1か月違えばガラリと変わってしまいますので、本当は月イチで周りたいのですが、仕事や天候などの兼ね合いもあって月二くらい。さらには訪ねる度に植物以外にもいろいろ面白いものを見つけて目移りもして、ペースダウンしていますけどね、まあ島のネコみたいにのんびりいこう（おいおい）。もちろん植生については学者のみなさんが調査されているでしょう。しかし季節を変えて隅から隅までとはいかないでしょうからね。新たな発見も期待しつつ楽しみながらやっています。

話は変わりますが、近年は子どもたちの遊び方も急激に変わってしまいました。もちろんテレビゲームやスマートフォンが中心の遊びも良いところはありますが、それだけでは足りません。五感をつかう体験や経験が脳を発達させて、想像力がついたり感性が豊かになったりもします。そのような意味からも自然体験は打って付けで、子どもたちがまだ小さいころはよく野外に連れ出していました。ある年の春、里山でモロコとりをしていたときのこと。小川の周りにはウマノアシガタの花が爽やかな風に揺れてきらきらと輝いていました。その光景をぼんやり眺めているうちに、里山をかけまわって泥だらけになりながら魚や昆虫を追いかけていたこ

「ウマノアシガタ」
海と空の青色と、黄金色に輝くウマノアシガタとのコントラストが強烈に春の訪れを感じさせてくれました。別名はキンポウゲ。いわゆる里山の花です。

「ヤマハコベ」
とても珍しいヤマハコベ。花は1㎝くらい。春の七草のハコベとはずいぶん趣が異なります。

ろの記憶が蘇ってきました。まもなくして「採れたよ！」と網をもった子どもたちが目を輝かせながら駆け寄ってきて、はっと現実世界に戻されたわけですが。「おっ！やったな～」。早春の祝島では、山道や段々畑の周りにウマノアシガタが咲き誇っています。オーバーな話かもしれませんが去年はこの懐かしい情景に涙がこぼれました。今年もきっと泣きます。シャクも群生していて、まるでアレンジメントの中のカスミソウみたいに周りの花や緑を引き立てていました。シャクは美味しい山菜でもあります。

5月上旬、ナツミカンの花の爽やかな香りが漂う山道では、ヤマハコベの花が主役でした。本種は西日本に分布しますが生育地局限のとても珍しい種類なものですから、日当たりの良い林縁を延々と飾っているのに驚きました。ハコベの仲間としては花が大きくてよく目立ちます。薄暗い森の林床で鎌首を持ち上げていたのはムサシアブミです。マムシグサと同じ仲間でちょっとグロテスクなサトイモ科の多年草。通常花（仏炎苞）の内部は黒紫色ですが、祝島では緑色もたくさん見られます。黒紫6：緑4くらいかな。少なからず同属のナンゴクウラシマソウもニョロリと生えていました。本種も割と珍しい種類です。

「ムサシアブミ」
ちょっぴり不気味なムサシアブミ。

木本類では、ヤブツバキがたくさん自生していることに気がつきます。本州、四国、九州の海岸線沿いや山地で普通に見られる樹種で、花は早いのは11月くらいから、遅いのは初夏の辺りまで咲いています。花をじっくり観察してみるとひと株として同じではないことが分かります。花色の濃淡、大きさ、ツヤの有無、花弁数、開き方等々に変異がありますし、珍しいですが芳香を放つものまであったりして。樹形もスラリとした立性から、横張り性、枝の枝垂れる木も。とくに優れた形質を持つもの、今風にいえば花形の整った私みたいなイケメン（妄想の世界です）、あるいは他とは大きく異なった形質をもつ、いわゆる変わり物（私はコッチかな）には名が与えられます。たとえば、長崎県五島列島の福江島で発見された｀玉之浦´はもっとも有名なヤブツバキでしょう。最後に山道でドキっとした一本を紹介します。小輪の淡紅色で、オシベは閉じ芯｀祝島小町´とでも呼びたくなるくらい慎ましく可愛らしい花でした。

さあ、次の島歩きではどんな花たちに会えるでしょうか。

「祝島のヤブツバキ」
祝島で出会ったヤブツバキ。凛とした美しさがあり、それでいてほっとさせてくれる素朴な花。ヤブツバキ探訪ではいつも「みんなちがって、みんないい」と童話詩人金子みすゞさんの詩をくちずさんでいます。

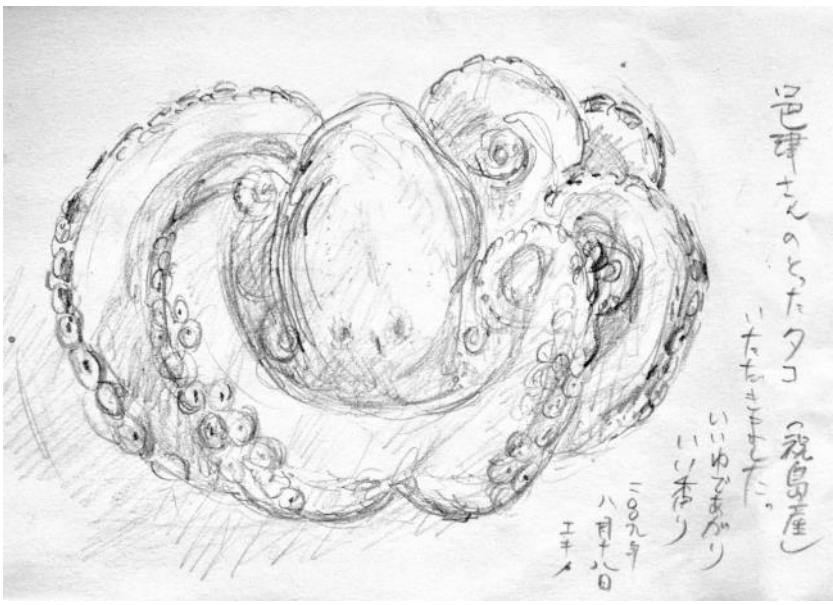
絵っきー展覧会（41）　『祝島のタコ』

エッキー浴野

2009年8月18日　タコ漁師の邑津さんからタコを一匹いただいた。

とれたての丸々一匹のタコを塩もみでぬめりを取るのも初めてだ。

茹で上げたタコを描いた。あたりにいい香りが漂う。そして超美味！感動の祝島！



「祝島のタコ」　鉛筆デッサン　A4 サイズ

祝島では水不足が続いています

國弘　秀人

昨年の梅雨明け以降、祝島ではあまり雨が降らず、11月頃から現在までずっと水不足の状態が続いています。例年なら貴重な雨をもたらす台風も、昨年は1つも来なくて、さらに秋以降も雨が少なく、年が明けてから時々降る雨も雨量が少ないので、なかなか貯水量が回復しないようです。連日のように役場の水道係から節水を呼び掛ける放送が流れており、島民の皆さんもできる限り節水をして、なんとか凌いでいる状況です。

昔は日常的に水不足で、島外から水を大量に運んでもらうこともあったのですが（かなり高額だそうです）、人口が減って島全体の水の使用量が減少したことと、米農家がいなくなり、大正時代に米作りのために造られたカタアのため池の農業用水を、水道用にも使えるようになったので、近年はここまで水不足が逼迫することは滅多になくなりました。しかし、昨年12月にはすでにカタアのため池の貯水量は取水口よりも下になって使えなくなり、長磯の貯水タンクの水も40%を切る状態になりました。島では、井戸水の利用を促進したり、工夫しながら節水を続けています。また、祝島の水不足のことが、テレビニュースで報道されたこともあり、美祢市からペットボトル入りの飲料水等の提供もありました。ありがたいことです。とりあえず、早くまとまった雨量が欲しいと願っています。

祝島ネット21が修理した手押しポンプも活用されています

カタアのため池（今年1月に撮影）

宮城県 出島(いずしま)・気仙沼大島　視察旅行記

國弘　秀人

11月23日～25日にかけて、全国離島振興推進員連絡委員会（略称：全推連）の総会・理事会・視察研修が宮城県の女川町と気仙沼市で行われ、私も理事として参加しました。総会と理事会が開催された女川町は、2011年の東日本大震災の際に、震度6弱の揺れと、津波によって壊滅的な被害を受けました。総会の会場「女川町まちなか交流館」の建つ女川駅前商業エリアは、その後に復興された新しい町です。交流館のロビーには、震災からの復興の道のりがパネル展示されていました。

全推連総会の会場

翌日、女川町の出島と、気仙沼市の大島を視察し、現地の方々との交流会も開催されました。両島ともに震災で大きな被害を受け、復興事業として本土と島をつなぐ架橋工事が始まりました。気仙沼大島には2019年に開通、出島にも2024年12月に開通する予定です。

定期船「しまなぎ」の向こうには
完成間近の出島大橋が見える

女川港から定期船「しまなぎ」に乗り、約20分で出島に到着しました。出島には集落が2カ所ありましたが、そのうちの北側の集落は津波によって集落全

出島の永清寺に建つ「女川いのちの石碑」

体が流され、集落の一番高いところに建っていた永清寺というお寺だけが辛うじて被害を免れました。集落には、今も1軒も家はありません。お寺の階段を上ると、「女川いのちの石碑」が建っています。この石碑は震災後に女川中学校の生徒たちが中心となって募金活動を行い、数年間かけて女川町内に21か所、津波到達点より少し高い場所に建てられています。石碑には「ここは、津波が到達した地点なので、絶対に移動させないでください。もし、大きな地震が来たら、この石碑よりも上へ逃げてください。逃げない人がいても、無理やりにでも連れ出してください。家に戻ろうとしている人がいれば、絶対に引き止めてください。」と刻まれています。彼らが震災によって、どれだけつらい想いをしたのか、そして、未来の人たちに、二度とそんな悲しい想いをさせたくないという強い意志を感じました。

再び「しまなぎ」に乗って、島の南側の集落へ移動。桟橋の先、防波堤の向こうには女川原発が大きく見えます。ここからの距離は約5km。上関原発が建ってしまったら、祝島からは4km弱なので、もっと近くに迫って見えることになります。女川原発は

堤防の向こうには女川原子力発電所が見える

福島第一原発よりも標高が約5m高いところに建っていたため、同じように津波に襲われ、一部が浸水したものの辛うじて大きな事故にはならなかったとのことです。

女川港まで戻って、バスに乗り換え、気仙沼大島へ移動。すでに開通している橋を通って島に入りました。ここは、NHK連続テレビ小説『おかえりモネ』のロケ地になった場所です。震災時には島の両側から津波が襲ってきて、波が島を越えて行ったそうです。今回見学した牡蠣の養殖会社「ヤマヨ水産」の4代目・小松武さんは、震災で自宅や養殖施設もすべて被災したそうですが、2年半後にようやく作業を再開、「オーナー制度」を開始して、全国各地の人と「ファンクラブ」のような関係を築いて頑張っておられるそうです。ちなみに、作業場に隣接して営む「ヤマヨ食堂」は『おかえりモネ』の撮影で使われたそうです。

大島の皆さんとの交流会も開催されました。橋で本土とつながって便利になった面もたくさんありますが、学校が本土側に統合されたり、地域内の交流が減ったり、防犯上の不安も大きくなったりといったデメリットもあり、どのように島を盛り上げていくか、まだ模索している状態のようでした。

ヤマヨ水産の作業場にて小松さんの取り組みを説明していただきました

震災からもうすぐ13年になりますが、今回の視察旅行は私にとっては、初めてその深い傷跡に直に触れたような経験になりました。その傷はまだまだ残っていることも感じましたし、そこから力強く立ち上がり、頑張っておられる皆さんの逞しさも感じることのできる旅でした。

祝島自由律俳句(13)

このコーナーでは、読者の皆さんから「祝島」をテーマにした自由律俳句を投稿していただき、毎回その中から何句かを紹介させていただいております。

夜廻りの拍子木清みて島護る
餅まきや手伸び腰伸び寿命延び
野路菊や神なる島の希少なる
篠崎　幸惠

絵仲間よ次は行こうと手渡す祝島カレンダー
達塔華

細魚干し人と猫との知恵比べ
餅まきに老いも若きも大ハッスル
寿司食す今年の恵方は叶島
國弘　秀人

つおる波欠航の知らせに耳澄ます
降り積もる雪スマホ片手に駆け出す二人
國弘優子

読者の皆様からの投句をお待ちしております。テーマは「祝島」です。応募は、メールまたは郵送にて、応募作品／作品についてのコメント（あれば）／名前（ペンネーム可）を記入して事務局までお送りください。メールのあて先は haiku@iwaishima.jp です。

お知らせ ＆ 募集

■2024年度の役員が決まりました

2024年度の役員は以下の通り決定いたしました。1年間よろしくお願いいたします。

◎会長：黒磯達則　　◎副会長：吉原信一郎
◎事務局長：國弘秀人　◎会計：國弘優子
◎監査：坂本正幸、石山泰人

■祝島の島ねこたちがマスコミに登場

今年に入ってから、祝島の島ねこたちが、テレビや新聞に登場して、祝島のPRに一役買っていますので紹介します。

BS-TBS『ねこ自慢』より

◎1月17日（水）の夜、BS-TBSで放送された『ねこ自慢』。番組中の「沖さんのネコ島撮影紀行」のコーナーで、祝島の港近くの島ねこたちが、わんさか登場しました。

◎2月1日（木）発売の「スポニチアーカイブス」２月号は、「愛さずにはいられない・にゃんこ特集」。その中で紹介されている「ねこの島」の一つに祝島が選ばれました。島ねこの写真と、祝島の紹介が載っています。ご希望の方は、お近くの毎日新聞販売店かスポーツニッポン新聞社東京本社販売局（電話03-3212-1181）までご連絡ください。１部210円です。

「スポニチアーカイブス」2月号より

編集後記

この冬は暖冬傾向だったので、寒がりな私にとっては比較的過ごしやすい冬でした。でも、1月の寒波の時には、関門海峡を抜けた細い筋状の雪雲がたまたま祝島の上空に架かり、短時間のうちに祝島は雪景色になりました。気づいた時には周りが真っ白の世界で、年甲斐もなく外に飛び出して写真を撮りまくりました。気持ちだけは、まだまだ若い！ですね・・。

さて、今回から新しい連載「うっちーさんの観察日記」が始まりました。昨年の春に「よもぎ杖の話を聞きたいのですが」と訪ねて来られたのがきっかけで出会えた内田祐介さん。植物が大好きで、“令和の牧野富太郎”と呼んでもいいのではないかと思うくらい、植物のことをよくご存じです。「会報に祝島の植物のことを連載で書いてもらえませんか？」とお願いしたら、すぐにご快諾いただきました。文章もとても面白いので、これからも楽しみです。

いよいよ、お待ちかねの神舞まであと半年になりました。これから準備が忙しくなりますが、がんばってやっていこうと思います。次号は初夏に発行予定です。どうぞお楽しみに！　（編集長：國弘秀人）

※事務局では会員の皆さんからの投稿をお待ちしております。投稿はホームページからも可能になっておりますので、ご意見・ご感想など、お気軽に投稿してください。
※祝島ネット21では随時会員を募集しています。会費は1年間6000円です。
入会ご希望の方は事務局までご連絡ください。

祝島ネット21会報「いわいしま通信」第72号
発行日：2024年2月20日　（頒価400円）
発行者：祝島ネット21事務局
〒742-1401　山口県熊毛郡上関町祝島
ホームページ　http://www.iwaishima.jp/inet21/

練塀の雪景色